セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO CAVALLERO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第3巻

晶文社

著者について

セルバンテス

一五四七年、スペインの貧しい外科医の家に生まれる。青年時代から演劇に興味をもち、ソネットや四行詩を書く。二二歳のときイタリアに渡り、ルネサンス末期のイタリア文化にふれる。七一年、スペイン歩兵隊の兵士としてトルコとの「レパントの海戦」に参加。左手を負傷し、生涯自由を失う。帰国途上海賊船に襲われ、アルジェリアで五年間の捕虜生活を送る。八五年に処女小説『ラ・ガラテーア』を出版。その後「無敵艦隊」の食糧調達人などの職についてしばらく創作を断念するが、のちに投獄されたセビーリャの牢で『ドン・キホーテ』の構想を得たといわれる。一六〇五年、五八歳のときに畢生の傑作『ドン・キホーテ』前篇を刊行、驚異的な成功を収める。十年後『後篇』刊。世界文学史上に輝く永遠の名作として読みつがれることになる。一六一六年没。

訳者について

会田由（あいだ・ゆう）

一九〇三年熊本県生まれ。東京外国語大学スペイン語科卒業。一九七一年没。

訳書―セルバンテス『サラマンカの洞穴』『模範小説集』、モラティン『娘たちのはい』、アラルコン『三角帽子』ほか。

ドン・キホーテ　第3巻

一九八五年五月一〇日発行

著者　セルバンテス

訳者　会田由

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・牧製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO CAVALLERO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第3巻

晶文社

I551.4
J2/3-3

埼玉県立久喜図書館
11807283

ドン・キホーテ　第3巻　目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

Miguel de Cervantes Saavedra

SEGUNDA PARTE DEL INGENIOSO CAVALLERO
DON QUIJOTE DE LA MANCHA

1615

ドン・キホーテ　第3巻　目次

才智あふるる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　後篇1

レーモス伯爵への献呈の辞……13
読者への序言……16
第一章　住職と床屋がドン・キホーテとその病いについて語り合ったこと……23
第二章　ここではサンチョ・パンサがドン・キホーテの姪と家政婦を相手に行なった注目すべき争い、そのほかおかしきくさぐさのことどもを扱う……40
第三章　ドン・キホーテ、サンチョ・パンサ、および得業士サンソン・カラスコの間で交わされた滑稽な議論について……48
第四章　サンチョ・パンサが得業士サンソン・カラスコの疑念をはらし質問に答え、そのほか知るにも語るにも価する出来事……61
第五章　サンチョ・パンサとその妻テレサ・パンサの間にかわされた、如才なくもまたおかしい対話、および思い出しても嬉しくなるその他のことども……69
第六章　ドン・キホーテとその姪および家政婦との間に起こったこと、そしてこれは物語全篇中の重要な章の一つである……80
第七章　ドン・キホーテが従士と交えた話およびその他大いに評判に価することども……88
第八章　思い姫ドゥルシネーア・デル・トボーソに会いにゆく道すがら、ドン・キホーテに起こったことが述べられる……99

第九章　ここでは、読んだらおのずからわかることが語られる……111
第十章　ここでは、サンチョがドゥルシネーア姫を魔法にかけるのに用いた巧みな工夫と、真実ならばこそおかしいその他の出来事が語られる……118
第十一章　『死』の朝廷の御車、あるいは荷馬車に会って、勇壮なドン・キホーテに起こった奇怪な冒険について……133
第十二章　勇ましいドン・キホーテにふりかかった、気負った『鏡の騎士』との異様な冒険について……143
第十三章　ここでは二人の従士が交わした、分別のある、なめらかな対話をもって、森の騎士の冒険がつづけられる……155
第十四章　ここでは森の騎士の冒険がつづけられる……164
第十五章　ここでは、鏡の騎士とその従士がいかなる人物であったかについて語られ、知らせる……181
第十六章　ドン・キホーテとラ・マンチャの思慮深い紳士との間に起こったことについて……184
第十七章　ここではドン・キホーテの前代未聞の気魄が到達した、また到達し得た最後の点と極限が明らかにされ、ならびにめでたく終わったライオンの冒険……198
第十八章　緑色外套の騎士の城、すなわち家においてドン・キホーテに起こったこと、ならびにそのほかとっぴないろいろのことについて……215

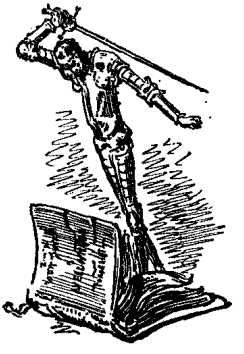
第十九章　ここでは恋する牧夫の冒険と、まことに面白いその他の出来事が語られる……230
第二十章　ここでは金持カマーチョの婚礼とともに、貧しいバシーリオの出来事が語られる……241
第二十一章　ここではカマーチョの婚礼が続けられ、ならびにうれしきいろいろの出来事……257
第二十二章　ここでは、ラ・マンチャの中心にあるモンテシーノスの洞穴の大冒険、これを勇敢なるドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャがめでたく達成したことが語られる……267
第二十三章　不敵なるドン・キホーテがモンテシーノスの底なし穴で見たのだと語った、世にも不思議なことどもと、そのあり得ない、すばらしさゆえに、この冒険を眉つばものと思われるにいたること……281
第二十四章　ここでは、この大いなる物語の正当なる理解に必要欠くべからざるとともに、なくもがなのくさぐさの瑣事が述べられる……299
第二十五章　この章においては、驢馬の鳴き声の冒険と、傀儡師（くぐつし）のおかしき冒険、ならびに占い猿の記憶すべき占いとが書きしるされる……309
第二十六章　ここでは傀儡師のおかしい冒険がつづけられ、それとともに、そのほか、まことに、いともめでたいことくさぐさ……325
第二十七章　ここでは、ペドロ親方とその猿がどんな素姓であったかが明らかにされ、それに加えて、ドン・キホーテが望んだようにも、考えていたようにも終わらなか

った、驢馬の鳴き声の冒険で、彼がこうむった災難が語られる……341
第二十八章　それらを読む人が、もし注意を払って読むなら、その真意が奈辺にあるかを解するであろうと、ベネンヘーリが述べていることどもについて……351
第二十九章　魔法の舟の名高い冒険について……360
第三十章　美しい女狩人を相手に、ドン・キホーテに起きた出来事について……371
第三十一章　ここではおびただしい大事件を扱う……379
第三十二章　ドン・キホーテがおのれを攻撃した相手に与えた答弁と、そのほか厳粛で、しかもおかしい出来事について……393
第三十三章　公爵夫人および腰元たちが、サンチョ・パンサと取り交わした、読むに価し、記すに足る味わい深い対話のこと……415
第三十四章　この章は比類なきドゥルシネーア・デル・トボーソを魔法からいかにして解くべきかについて知ることを得た次第を述べるが、これは本書中のもっともすばらしい冒険の一つである……428
第三十五章　ここでは、ドゥルシネーアを魔法から解く方法についてドン・キホーテが受け取った知らせが、その他の驚くべき出来事とともにつづく……440
訳注……454

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

ブックデザイン　平野甲賀
挿絵　ギュスターブ・ドレ

才智あふるる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　後篇1



レーモス伯爵*への献呈の辞

さきごろ閣下へ、上演されるに先だって印刷されました私の戯曲集*をお贈りしましたとき、私の記憶ちがいでなければ、ドン・キホーテは閣下の御手に口づけをいたしにまいろうと、すでに靴に拍車をつけておりますと申しあげました。しかし、ただいまは、彼は拍車をつけおえて、すでに発足いたしましたと申しあげます。そして、もし彼がそちらへ到着いたしましたら、私も閣下へいくらかのご奉仕をいたしたことになろうかと存ぜられます。それと申すのも、後篇の名にかくれて変装し、この世をうろつきまわりました、もう一つの『ドン・キホーテ』*がひき起こした、不快感や胸くその悪さをきれいさっぱりなくすために、本物をよこしてくれと、あちらからもこちらからも矢の催足をいただいているからでございます。

なかでも、もっともそのことに熱意を示してまいったのが、シナの大帝でございました。というのが、一月ほど前になりましょうか、私あてにシナ語で書いた手紙を使者に託して、『ドン・キホーテ』を送るようにと要求して、と申すより、懇望してまいったのでございます。それと申すのが、皇帝は

カスティーリャ語を教える学院を創りたい、しかも、そこで講義する書物はドン・キホーテの物語のそれにしたいと望まれていたからでございます。それにつけ加えて、私にその学院の院長をつとめに出向くようにと書いてございました。そこで私はその手紙の持参者に、陛下は私のためにと、何がしかの旅費をお託しにでもなったろうかと訊ねました。すると、相手はそんなことは思いつきもしなかったと答えました。

「それなら、お前さん」と、私は申しました。「あんたは、あんたのお国のシナへ、一日に十レグワなり二十レグワなり、派遣されてここへ来なすったときの行程で、お帰りなさるがよい。というのが、私はそんな長い旅路にのぼるほど元気なからだではないからです。それに、健康がすぐれないばかりか、私はひどくお金に窮しているのです。そのうえ、私には皇帝の中の皇帝、君主の中の君主として、ナポリご在勤のすばらしいレーモス伯爵がおわして、しかもこの方は、学院だの院長だのという大げさな肩書なしに、私を扶養し、庇護し、私がこうしていただきたいと願うよりもはるかに恩恵を与えてくださるからだよ」

これで、私はその男を追い帰しましたが、Deo volente（神がおゆるしくだされば）、あと四カ月で書き終えるつもりの書物『ペルシーレスとシヒスムンダの苦労*』を閣下に差し上げることとして、これで私もおいとまいたします。この書物は、もちろん気晴しの読みものとしての話ですが、わが国の言葉で書かれたもっとも悪い本になるか、それともっともすぐれた本になるはずでございます。いや、『もっとも悪い本』と申したことを、実に後悔いたしていると白状いたしましょう。それと申すのが、私の友達らの意見では、かならずや、達しうる極限までのすぐれたものになると申すのですか

ら。では、閣下よ、望ましい健康にめぐまれ給えかし。と申すのも、間もなく『ペルシーレス』も御手に口づけいたしましょうし、私も閣下のしもべとして、おみ足に口づけいたす次第でございます。

一六一五年十月末日、マドリードにて。

閣下のしもべなる
ミゲル・デ・セルバンテス・サベードラ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c